

自画に題す（夏目漱石）

幽居 人到らず

独り坐して 衣の 寛かなるを 覚ゆ

偶 解す 春風の 意

来たり 吹く 竹と 蘭とに

幽居人不到 獨坐覺衣寛
偶解春風意 來吹竹與蘭

解説 大正十五年春、自ら描いた南画の画賛として作った詩。

語釈 ※幽居Ⅱ俗世間を避けて静かなところに隠れて住むこと。

※不到Ⅱ訪れる人もいない。※覚Ⅱ知る、感じる、という意。

※衣寛Ⅱ着物が、ゆつたりとしていること。くつろぐさまをいう。

※偶解Ⅱはからずも、このとき理解することができた。

※春風意Ⅱ春風のこころ。

通釈 隠遁者の佗びた住いには訪れる人としてなく、一人じつと坐っている内に、いつしか着ている着物もゆつたりとして楽に感ぜられ、心がカラリと開かれたような気がしてきた。この時はからずも、この家には私のほかに、二人の君子の居ることに気がついていた。吹きわたる春風が、庭さきの竹を鳴らし、蘭の香りを運んでくれたからである。